

最近身の回りで気になること(松野みどり教授 退官 記念論文集)

著者	松野 みどり
雑誌名	金沢法学
巻	46
号	2
ページ	7-9
発行年	2004-03-25
URL	http://hdl.handle.net/2297/4413

最近身の回りで気になること

松野 みどり

こんな場面に遭遇した方はおられないでしょうか。学生がノックもなしに部屋にヌーと入ってきて、幽霊のようにならずにいる。背筋が寒くなります。日常茶飯事の光景だと思いますが、授業中ペットボトルを抱えてはいつてきて、人前もはばからずゴクゴクと飲み始める。目がしょぼしょぼしてきたおばあちゃんには、このような行動は目に余るものがあり、常識を逸脱していると嘆かざるをえないのです。

最近の若者の識字率の低さは定評があります。石坂洋次郎も真っ青。「山のかなたに」にでてきた「変しい、悩ましい」手紙に、かつて読者はニヤリとしたものですが、いまや笑い話ではすまなくなっています。さらに聞くところによると、米をとぐ時、洗剤を入れたとか、干支を英語で書かせようとしたら、日本語もわからなかつたとか、おむつのCMを見た若い母親が、我が子のおしっこがブルーでないのを心配して医者に駆け込んだとか、話の種は尽きません。

気になるのは、なによりもこうした常識不足を当人が意識していない点です。従って彼らに悪気は感じられないのですが、それだけに罪は深いのです。ただ単に物を知らないだけです。この位のことには知ってるだろうという教師の臆断は禁物、裏切られやがて講義に大きな支障をきたすことになります。おそらく各人の勉強してきた環境が、大きく影響しているものと思われれます。個人があまりに孤立しているのです。他人との連携が密ならば、きつとどこかの段階で自分の間違いに気づいた筈です。しかも一人一人が張り巡らせているアンテナの狭さに加えて、想像力も格段に劣ります。物事を総合的に判断する力がついていないのです。もつと貧欲にがむしゃらに、知識を広く吸収し、清濁あわせ飲みこんで、それを濾過する力を養ってほしいものです。

それに最近の親や教師が、子供たちに払う異常なまでの気遣いはなんだろうか。ごますりで見紛うばかりの現象です。世界中で少子化傾向が問題になっている昨今、親は待ち望んで生まれてきた子供を、期待の星、宝物として丁寧な大事に育てよう。きっとどこかで「己を越えてもらいたい」と虫のいいことを願いながら。それがどうした弾みか、ある日突然、子供は粗暴な悪魔に変身しています。親は当惑しながらついに精神科医の門をたたくことになります。

フランスの雑誌「Le nouvel observateur」(2002/novembre 6～octobre 31)に興味ある記事が載っていました。題して「Le temps des enfants-tyrans」「暴君と化した子供たちの時代」とでも訳しておきましょう。親から相談を受けた小児精神科医や小児心理分析者の意見が、ふんだんに紹介されています。アンケートの対象となった子供の年齢は5～12歳。フランスの教育制度でいうと初等教育、すなわち幼稚園から小学校6年生に相当します。まさに暴力の低年齢化です。問題児を受け容れる教育機関は、フランス全土で360校、一校当たり50人収容ですから、同世代の問題児はざっと見積もって18、000人位になります。登場する子供たちの言動は、あきれかえるばかりですが、日本の場合も幼少期と思春期の少年たちをあわせて、その4%が親に暴力をふるっていると聞くと、ただ野次馬気分ではすまされず、問題がぐっと身近に迫ってきます。フランスの場合、教養程度もさして低いとはいええず、社会的立場もある親たち、たとえば企業の幹部、保母、法学者、そして教授などが、真剣に悩み、うちひしがれ、責任を感じ、絶望し、無力化している姿を見ると、知らないところで密かに起こりつつある不気味な変化に、空恐ろしさを覚えます。

注目したいのは、この両親たちの年代です。フランスの場合、ほとんどがMai-68、5月革命のころに生まれています。彼らの行動パターンのキーワードは、確か「対話」とか「交渉」ではなかったでしょうか。彼らが30年余りをかけて築き上げようとしたものはなんだったのか。子供と対話し、ことをすすめるにあたってなんでも

子供の意見を聞いて、民主化を目指したのではなかったか。彼らは家庭の中に民主主義を定着させようとした。自分たちの親の世代には思いもよらなかったことです。そして事実、親と子、教師と生徒のあいだに、民主的な関係は築かれました。

しかしその過程でおろそかにしたものがあつたのだと思います。平等だけが万能薬ではなかったのです。親子、教師と生徒のあいだには、否定しがたい「縦の関係」が、歴然としてあります。その関係維持のためには、たがいが己の立場を自覚しなければなりません。親や教師の側には、「プロ根性」がいます。「プロの父親」、「プロの母親」、「プロの教師」としての役割。本来の役割を再認識しなければならぬのです。子供の側では、つねに親や教師に対して、頼れるものを求め、的確な解答を期待します。安全性が保証され、信頼できる強い存在を望んでいるのです。

すり寄るだけでは、ことは解決しません。ところで子供たちのアキレス腱をご存知ですか。経験不足です。どんなにあがいても、親や教師を追い越すことのできない経験というバリアーがあるのです。